

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 武田 優子	留学機関名 ブエノスアイレス大学
留学先国名 アルゼンチン	留学期間 西暦 2009 年 3 月 ~ 2011 年 2 月
研究テーマ 非西洋圏近代国家における西洋文化受容と自文化構想 ーアルゼンチンの独立百年祭と二百年祭における自意識の交渉過程を事例としてー	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>日本を含む非西洋圏近代国家における西洋文化の受容過程とはいかなるものか。そこでは西洋文化を積極的に取り入れながら、どのように地元文化を否定し、あるいはそれと融合させた自文化が構想されてきたのか。本研究の目的は、そのメカニズム、問題点、対処法を、日本と同じく 19 世紀後半に近代化政策に着手した新興国家アルゼンチンのふたつの独立記念日の比較を手がかりに、歴史人類学の視点から精査し解明することにある。</p> <p>アルゼンチンには、次のような言い回しがある。「メキシコ人はアステカから下り、ペルー人はインカから下ったが、アルゼンチン人は船から降りた。」これは、「アルゼンチンはヨーロッパ移民を主体とし、アメリカ大陸に文化的ルーツを持たない国家である」という、独自文化の不在を自認した、いわば逆説的ともいえる国民意識のあり方を示している。スペインからの独立(1816年)後に開始された国家建設過程において、アルゼンチンは国家をいち早く近代化に導くために、「進んだヨーロッパ文化をアメリカ大陸に移植すること」を目指した。その具体的方途が、「生ける文明の伝達者」たるヨーロッパ移民の大量誘致であった。結果として、19世紀中葉から20世紀初頭にかけて大量のヨーロッパ移民が押し寄せ、アルゼンチンはラテンアメリカ随一の白人国家となった。しかしこれは、「移植されたヨーロッパとは何か?」という、今日に至る自文化への絶え間ない問いの出発点ともなった。</p> <p>長らく、土着性に根ざした独自の文化こそが、ある国民と他国民を分け隔てるものだと考えられてきた。この文化政治学に対し、近年のナショナリズム論は、ある文化と国民の等号関係は人為的なものに過ぎず、それゆえ国民とは、「創られた伝統」を共有する「想像の共同体」であると指摘した。この視座は、「一国民・一文化」という近代国民国家の文化的統合論理を解体した点で画期的だった。しかし両者とも(文化を本質的に捉えるにしろ構築的に捉えるにしろ)「独自文化の存在」を認識の出発点とする点において、実は共通している。このような認識では、そもそも土地と文化の一致を前提としない「祖国喪失的な文化」の具体的あり方を理解することはできない。この認識に基づき申請者は、アルゼンチンの独立百年祭(1910年)と二百年祭(2010年)に表出された/される文化的自意識の比較検討を行い、独自文化提示の困難の中で非西洋圏近代社会ではどのように新しい文化が創出されてきたのかを解明する博士論文を構想している。</p> <p>現代グローバル社会では、移民の存在が常態化しつつある。その結果、今後ますます「土地と文化が一致しない文化」が生成され続けていくだろう。このような文化状況において、我々はいかに日々複雑化してゆくローカル文化を生きるのか。本研究は、このような極めて21世紀的な地球規模の課題に取り組むものである。</p>	

# 成果報告書

記入日 24年 4月 20日

氏名 武田 優子	留学先国名 アルゼンチン	所属機関 一橋大学大学院
研究テーマ：アルゼンチンにおける西洋化と自文化生成過程 —建国百年祭と二百年祭における自意識の交渉過程に焦点をあてて—		
留学期間： 2009年 9月～ 2011年 8月 (自費で2012年3月まで延長)		
<p>現代世界を生きる私たちの切実な課題のひとつは、グローバル化した状況のなかでローカルな文化を生きることの意味を積極的に見出すことにある。しかもそこには、私たちが生きるローカルな文化がすでに相当程度西洋化しているという現実認識がなければならない。では、西洋近代的な普遍的諸価値が地球規模で拡散していく過程において、個別的なるものは日々どのように生成され、いかなるローカル性が生きられているのか。本研究の目的は、そのメカニズム、問題点、対処法を、日本と同じく19世紀後半に近代化政策に着手した南米アルゼンチンという場から学び考察することにある。</p> <p>具体的に本研究は、(1)アルゼンチン建国百年祭と建国二百年祭というふたつの記憶の場におけるナショナルな主体(自文化)構築のメカニズム、(2)アルゼンチンの現在におけるローカルな文化状況、特にブエノスアイレスの人々の日常文化実践、以上二点の精査を通じて、上述の問いを追究することを目標としている。</p> <p>先に、今回の長期調査で学ばせていただいた最も重要なことを述べておきたい。それは、「何が現場で切実な問題であるのか、その問題自体を現場の人々から／と学ぶ」、ということを考えながらその実行法を模索する、ということである。以下、調査内容の概要と経緯を記述していきたい。</p> <p><b>①建国百年祭における集合的記憶の編成</b></p> <p>スペインから独立以後の近代国家建設過程において、アルゼンチンでは独立以前の過去、すなわちスペイン性と先住民性がともに否定され、いわば過去なき未来の建設が目指された。独立アルゼンチン人の文化的・歴史的主体化は、現状否定から始まり、それこそが、絶対的主体構築というなかば自明の使命感をめぐる、自文化への問いの出発点であった。近代国家建設過程におけるヨーロッパ諸国からの移民の積極的受入や近代的都市計画による欧化政策の断行は、ヨーロッパをアメリカ大陸に移植すること、すなわち、過去なき未来建設の具体的な方途であった。</p> <p>ヨーロッパの物理的移植を原動力とした急速な近代化が進むなか、アルゼンチンは1910年建国百年祭を迎えた。過去なき未来建設が進行していた当時のアルゼンチンでは、どのようなアルゼンチン(人)像が示されたのか。それはアルゼンチン(人)の現在とどのような関わりがあるのか。筆者は、この問いを1つめの課題として、ブエノスアイレス市の国立図書館と国立国会図書館において文献調査を実施した。</p> <p>調査にあたり、先行研究でこれまで指摘されてきた次の点に留意した。すなわち、ヨーロッパ諸国からの移民を積極的に受入れていた当時のアルゼンチンでは、排他的な文化ナショナリズムの高揚および土着的スペイン・クレオール(クリオージョ)文化の称揚がみられた。つまりそこでは、それまで否定されてきた植民地時代の過去が、アルゼンチン国民文化の起源として積極的に再評価された。アルゼンチンはヨーロッパのレプリカなどではなく、独自の伝統文化を有するオリジナルな存在であるという主張である。だとすれば、スペイン国王アルフォンソ13世の叔母イサベル皇女が国賓として百年祭に招聘されたという事実は、それを象徴するものであったと考えられる。</p> <p>しかし、その後も積極的にヨーロッパ移民の受入れやヨーロッパ文化の受容が奨励され、アルゼンチンのヨーロッパ化が進行していったことは否めない。アメリカ大陸(先住民)性とスペイン性の融合する存</p>		

在としてアルゼンチン人を説明しきることは現実的に困難である。では実際のところ、アルゼンチン(人)性を説明するにあたり、アメリカ大陸性、スペイン性、ヨーロッパ性の関係はいかなるもので、そのからくりはどのようなものだったのか。

この問いに対し、雑誌 *Caras y Caretas* を主な素材として、当時流通した視覚資料を調査したところ、次のような結果が得られた。それは、スペイン性とヨーロッパ性の同時称揚、ならびに先住民性の無視もしくは否定である。それでは、例えガウチョ(牧童)と呼ばれる混血児が国家的シンボルとして視覚化されたことが確認されたとしても、クレオール(クリオージョ)の混血性は根本的に否定されざるを得ない。スペイン性の再評価は、先住民性との融合の賞賛などでは断じてなく、反対にそれを拒否する効果をもっていた。だとすれば、表層における土着性の称揚は、移植されたヨーロッパ建設それ自体を否定するのではなく、むしろ、アルゼンチンの白人性—「白人の坩堝」という国家像—を正当化するものであった。

## ②建国二百年祭という場

二百年祭の一環事業として、建国二百年記念博物館がブエノスアイレス市の大統領府近くに開館した。早速博物館を訪れた私は、一枚の大きな絵画の前でふと足を止めた。解説が絵画の正面右にあったが、1人の青年が熱心にそれを読んでいる。割り込む余地はない。同フロアの絵画を数枚見た後、再度そこに戻ると、状況は何も変わっていない。既に5名ほどがその青年の後を待っていた。その絵画が、強烈にその意味への関心を掻き立てる類のものであったことは確かであった。

すると、博物館で働く一人の青年がこちらにやってきた。「皆さん、この絵について知りたいのですね。お時間がありますか。私が解説して差し上げますよ。」

ありがたいことに、青年は詳細に絵画に描き込まれたモチーフのひとつひとつの意味を熱心に解説してくれた。それは、アルゼンチン独立以後の二百年間—つまりとてつとての総体・結果としての現在—を視覚的に説明するものだった。周囲でそれを聞いていたアルゼンチン人も5人から7人へ、最後は20人ほどにもなり、うなずいたり、突如質問をはさんだり、自分の考えを述べたり、隣の人と議論を始めたりと、皆その熱を共有していた。アルゼンチン(人)とは何者か。何者だとされてきたのか。われわれの現状はどのように説明されるのか。皆それらの問いにただならぬ関心を持っている様子が伺われた。

アルゼンチンという国やその人々に大きな敬意と強い愛着を感じる私も、その関心を共有しているつもりであった。しかし、外国人や帝国主義者、あるいは第一世界という言葉が飛び交うたびに、何か少し居心地の悪さを感じた。同時に、自分は一体どのようにその場に参加することができるものかと考えさせられた。実際のところ、この例はほんの一例にすぎない。

家族が揃う日曜日の昼食で、あるいは大学付近のカフェで、例えばマルビナス(フォークランド)諸島の領有権をめぐる話題が普通に飛び出す。傍観はできない。私も日本における領土問題や中国の香港返還の事例など、わずかな知識を動員しながら議論への参加を試みる。

二百年祭とは、それに正面から向かい合うにしろ、それ自体を拒否するにしろ、あるいは無視するにしろ、アルゼンチン人とは誰か? 現在がこうあるのはなぜなのか? という問いを正面からわれわれにつきつけるものであったのである。人々が購入する新聞にこだわりをもち、あるいは他者の購入する新聞がどれなのかを気にし、マルビナス諸島の領有権について、歴史について、国家モデルについて、そしてアルゼンチンの未来についてとてつとて熱く語り、私の考えや意見をも時として暴力的なまでに必要と感じるとき、その語り続ける行為自体の意味について、私自身も考えざるを得なかった。百年祭から百年が経過した今、人々は再び同じ問いに立ち返った。そこに立ち返らざるを得なかったのかもしれない。私は、百年祭や二百年祭それ自体、あるいは国民文化の構築性やそのメカニズムの解明のみならず、百年祭以降のアルゼンチンの百年間について改めて考えていくことが不可避であることを思い知らされた。

本奨学金受給により、2010年5月21日から25日の5日間に渡る盛大な建国二百年祭典の現場調査を含む、二百年祭前後の社会文化状況を、一連のプロセスとして現地で詳細に調査する機会に恵まれた。まず、当初2つ目の研究課題として筆者が掲げた、二百年祭という記憶の場に関する調査について明らかになった重要な軸を挙げれば次のようになる。

二百年祭は、百年祭の否定的再記憶化の場だったといっても過言ではない。そこでは、百年祭時代に形成された国家イメージの基盤、すなわち、ヨーロッパ性、同質性、ブエノスアイレス中心主義、非アメリカ大陸性がことごとく否定された。代わって全面的に打ち出されたのが、多文化主義・連邦主義・ラテン

アメリカ主義モデルである。アルゼンチンでは、長らく「白人の坩堝」という同質的な国家像や文化のヨーロッパ性が支配的文化として流通してきた。それには、ヨーロッパ性を否定しうる先住民性を排除すると同時に、各移民集団の異質性を相殺する一石二鳥の効果があつた。本研究では、前述のようにその成り立ちを、百年祭の時点に立ち返ることで確認した。それは、エスニシティよりもむしろ階級が、社会を認識し語りうる普遍的言語として、これまでのアルゼンチンで機能してきたことと無縁ではないだろう。

これに対し二百年祭では、エスニシティや多文化性が全面的に可視化された。公式祭典においても、総勢4000人からなる80もの「民族(移民)グループ」による伝統衣装パレードが行われた。「統合のパレード」と名づけられたその行進には、マジョリティ集団イタリア、スペイン系はもちろんのこと、ポーランド、アルメニア、ボリビア、韓国、アラブ諸国、日系、アフロ系等にいたるまで、「民族」別に分類された各グループが参加した。これまで無視されてきたマイノリティの存在が少なくともそこに示されたことは、大きな変化である。

二百年祭時代の現在、アルゼンチンでは階級的言語に加え、文化と民族が国家・社会を説明し語りうるツールとして改めて認識されている。学術的テーマとしても、そのような視角が注目を集めている。しかし当然のことながら、多様性の統合を謳う多文化主義が、純に対する混としてのラテンアメリカ主義という新たなアイデンティティの枠組みを前提とし、欺瞞と化してしまうのであれば、そこには過去との断絶以上の連続性が認められるといわざるをえない。

二百年祭記念博物館でひととき注目を集めていた絵画、アルフレド・ベタニン作『サン・マルティン、ロサス、ペロン』(1972)は、一貫した論理で二百年祭時代の国家像を視覚的に、そして明快に説明するものだった。中央には仰向けの裸体女性が描かれている。アルゼンチンのアレゴリーである。彼女の手足は縛られ、体は傷ついている。女性の周囲には、スペイン植民地主義、イギリス帝国主義、寡頭エリートによる支配等からの解放運動が描かれている。サン・マルティン、ロサス、ペロンは人々を解放に導くリーダー達である。しかしそこには同時に、解放を阻む抑圧者達が描きこまれている。抑圧者達が存在する以上、解放はいまだに未完のプロジェクトである。

アルゼンチンとは何か、アルゼンチン人とは誰か、たった一枚の絵がそれを説明しきっている。その絵が必要とされているのが二百年祭時代の現在の状況そのものであり、その説明への賛否が人々を激しく分け隔てている。公式発表によれば、わずか5日間の二百年祭祝典には約600万人もの人々が参加した。歩行者天国となった16車線もの7月9日大通りを、南北見渡す限り人々が埋め尽くし、少しの躊躇もなく「アルゼンチン! アルゼンチン!」が大合唱された。私は、そこに居合わせた人々の熱気から、単なる政治的イデオロギーやナショナリズムとしては片付けられぬような、欲望や願望のようなエネルギーを感じた。二百年祭という場への参与は、私自身をも観察者として安全地帯にとどまらせておくことを困難にするものであった。

### ③今後の予定と留学全体の感想

絶対的主体の構築とその必要性が自明視される状況では、ヨーロッパ性/ラテンアメリカ性、帝国主義(第一世界)/植民地(第三世界)、寡頭支配者/労働者などの枠組みが参照され続けることとなる。近代的な自他認識は、他者を規定し、その征服やコントロールを正当化する。そのような自/他を隔てる友/敵の政治が支配する世界には、他者の受容や多文化の共生という点で限界がある。共存すること、共にあることとはいかなることか。本研究を通じてこうした問いが深まり、新たに次のような課題が浮上した。人々はどのように現実の生に共存の術を見出してきたのか。そこで筆者が注目したのがタンゴである。

タンゴは、百年祭から二百年祭にいたる百年の間に、アルゼンチン性を語る一つの大きなツールとしての位置を獲得してきた。真の国民文化、構築された国民文化、観光資源として消費される文化、あるいはアルゼンチンのヨーロッパ性を正当化する首都中心的文化だと考える人も少なくない。アルゼンチン人のなかにもこのような意識が強く、タンゴはツーリストのものだと明言する人もいる。

しかし、そのどれもがタンゴをアルゼンチン特有の文化である/でないという軸で議論を展開している。それは、百年祭、二百年祭という公的記憶提示の場で明確に示されてきたように、ヨーロッパ性/ラテンアメリカ性、白人性/混血性といった構図、つまり自/他の認識を軸に可能となる文化認識である。筆者は、タンゴをめぐる語りと同様の構図をみながらも、実際にそれらを日常の一部として実践している人々にとり、そのように言語化あるいは解釈されてきたタンゴはいかなるものなのかに関心がある。留学後半は、文献調査の傍ら、国立タンゴアカデミーのV.チャモロ氏に許可をいただき、タンゴ実践者へのインタ

ヴェューとタンゴ実践の場での参与観察を行った。この計画を遂行するにあたり、タンゴ実践者との共通言語を習得しながら調査を行う必要が生じた。よって、奨学金受給終了後、自費で調査を半年間延長した。

現在は、以上すべてを包含する博士論文の執筆にとりかかっていますが、特にブエノスアイレスでタンゴを自らの日常として実践する人々の夢や願望そのものとしての生き様、そこに宿る美と生命のあり方に大きな敬意を表します。何か小さな形でも、皆様が私と共有してくださったことを、未だ身体的記憶として宿る現在の時間を表現し恩返ししたい、そのような思いで頑張っています。今回の調査は長期に及び、様々な方からの助けなくしては非常に苦しいものになるはずでした。

二百年祭をはさみ、新たなアルゼンチンの国家モデルに関する議論が盛んになり、私自身も明確な立場表明を迫られる場面に幾度も出くわしました。それぞれに特別な思い入れや思い出、あるいは論理があり、どれも愛おしく、時として大きな苦痛が伴いました。しかし、人々と様々な議論を重ねていくなかで、共にあることとはいかなることなのかと日々考えさせられました。そうしたことから、二律背反を意識の上でたたかわせる場から、人々の日々の実践そのものという場へと視点が動いていったことは自然な流れでした。いわば、意識から無意識、記憶から忘れへのシフトとも言えるかもしれません。

生身の人間との日々の関わりこそが、既に最も価値ある学びであること、そしてそこに参与し素直に学ばせていただくことがいかに大切であるのか。こういったことは、今後の研究生活に向かうにあたり、ひとつの転換点をもたらしてくれました。それは、二百年祭という特別な場に遭遇すること、そしてその場をアルゼンチン人の同僚や友人たちと共有する過程なくしては到底不可能なことでした。

アルゼンチンは、豊富な食料、多大な資源、高い識字率を特徴としていますが、大卒において、不安定な経済、質の悪い民主主義や政治制度といったカオスの側面が注目されがちです。それは、「アルゼンチンの謎」として学術的な関心を集めるほどです。現実問題として、私が滞在した2年半の間にも、日常物資の価格が目まぐるしく変化しました。例えば食肉価格は、数字の上で2.5倍にも跳ね上がりました。今まで15支払っていたものに対し、40支払うといった計算です。数字自体に価値があるとは思えなくなってきました。

しかし、これまで幾度もハイパーインフレを経験してきた現地の方々には、生活の大変さに対して熱心に愚痴をこぼしながらも、同時にどこかクールでもあるようにも思われました。「現実がいやでも残念ながら現実を変えることなどできない。アメリカ合衆国人やヨーロッパ人にはそれがわからない。われわれは現実の各状況に自分を合わせてうまくやっていくしかない」、と私の友人は言いました。友敵関係や困難を現実の生として引き受けざるを得ないという現実には、どうやらわれわれが学びうる知恵の宝庫のように感じられました。

最後になりましたが、このような貴重な機会をお与え下さった松下幸之助記念財団および関係者の皆様には、心よりの感謝と御礼を申し上げます。どのような言葉を持っても不十分です。貴財団奨学生としてこの機会に考え実行してきたことを確固たる基盤としながら、21世紀日本のアジェンダ立案に少しでも貢献できるよう、今後も研究に邁進して参ります。これまでご支援くださり、誠にありがとうございました。